

俳句結社「京鹿子」編『歳時記』への道

佐藤多恵子

住友生命本社に文芸部「三星会」という俳句会があり、今も続いている。入社3年目に私どもの課長になられた吉田すばる氏は「ホトギス」同人、「京鹿子」の幹部同人として活躍しておられた。氏のお勧めにより、2年先輩の梶本きくよさんと私は俳縁を得た。毎週月曜日にノートを提出し、氏の添削指導を賜ることになり、間もなく三星会に入れていただいた。

三越の近くにある会社の保養施設での三星会、若手の青潮句会、生命保険協会句会に毎月出席し、緊張感のある楽しい時間を過ごすことが出来た。それまでの私は進学できなかった悔しさと、青春の大切な時間を切り売りしているというディレンマに陥っていたのだが、俳句に救われた。

やがて、鈴鹿野風呂先生主宰の「京鹿子」に入社し、毎月5句投句、数年間は1句載るだけだったが、結社に属し俳誌を読むことはよい勉強になった。

京鹿子大阪支部の月例会句会が椎寺町の月江寺で、鈴鹿野風呂先生ご出席の下に催されていて先生の温顔を拝し、また、その会の代表者・桂星水氏が浜野（現姓吉田）以登さんの母方の御祖父であられたことも嬉しかった。星水ご一家は、実に俳人一家であった。以登さんのお名前も高浜虚子夫人と同じである。星水氏の医業を引き継がれたご子息夫妻も京鹿子同人であった。野風呂先生の大阪のお宿は星水邸、浜寺の以登さんのお家にも来られ、海岸の松林を吟行されたそうである。

月江句会での最も素晴らしい思い出は、星水邸での井原西鶴に因む大矢数句会である。その夜は通常の句会の後10時から翌朝6時まで、10分ごとに席題を変えて、ひたすら作句し、1時間ごとに10分の休憩をする。その間に茶菓のおもてなしがある。野風呂先生は500句近く、星水氏、すばる氏等は300句超、私でさえ230句を程を得た。朝には奥様手製の幕の内のようなお弁当と熱いお汁をご馳走になり散会する。参加は14～5名、私は2回参加させていただいた。1回目は結婚の前年、2回目は結婚後、口喧しい親も夫も許してくれた。

昭和36年2月に結婚し、翌年4月長女を出産したのだが、妊っている時期に京鹿子の全国大会があり、募集大作賞に「受胎」と題する作品（15句）を応募したところ、105篇中の1位となり大作賞を戴いた。これは以後の作句活動への請求書である。3年後に5位獲得まで、かなり重荷であったが、私なりに努力した。長女・長男・次男（年子）を育てつつ、消長はありながらも投句を続けた。

昭和45年、京鹿子社50周年を記念して、結社の歳時記が出版され、私の作品23句が採用された。

春宵や山菜の膳次の間に 早口の宣伝カー来ぬ目刺し焼く 花疲れ鍵は夫にまかせあり 蠅生る妻と呼ぼることに馴れ 飯飽る人をうとみて二三日 万緑や通天閣の午報鳴る 薔薇一輪コップの中の日の戯れ 旅疲れ枇杷のはしりを街に見し 夕薄暑魚焼く顔は歪むもの サルピヤ燃ゆ受胎を知りしときめきに 一斉に午笛上がるや草いきれ 裸子の質問一日つきまよふ 胎教を今日より秋の心とす 赤き靴買ひぬ花野を歩くため 二人目は負はれて育つ冬隣 菊人形宙を見つめしまま暮るる 出羽三山雪と便りの柿荷着く りんごの皮断たじ胎児と吾の刻 大阪の水の濁りに風花す 年用意すみぬ時計を正しうす 煽られて小さき我や年の市 白菜の見事な渦を真二つに 手はいつも五体の従者あかぎれて	京鹿子五〇周年記念「歳時記」掲載句
春の宵 目刺 花見 蠅生る 飯飽る 万緑 薔薇 枇杷 薄暑 サルピヤ 草いきれ 裸 秋 花野 冬隣 菊人形 柿 林檎 風花 年用意 年の市 白菜 轍（あかぎれ）	季語